

狂犬病は、

発病するとほぼ100%死亡し、
有効な治療法がない恐ろしい病気です。

狂犬病は人や犬、猫をはじめとしたすべての哺乳動物がかかる人獣共通感染症で、発病した場合は人も動物も重篤で悲惨な神経症状を伴いほぼ100%死亡します。

犬の場合、狂犬病に感染すると通常2～8週間で発病します。発病には狂躁型と麻痺型の2つのタイプがあります。狂躁型は、発病するとまず食欲不振や暗所へ隠れるなどの挙動異常を示します。さらに音や光の刺激に過敏になり、興奮しやすく攻撃的で、目の前のものに何にでも反射的に咬みつきます(図1)。やがて、意識障害に陥り、麻痺が全身に及んで死亡します。麻痺型は麻痺症状を主に示し死に至ります。発病している犬の唾液中には



図1 狂犬病を発病している犬 (タイ赤十字研究所)

多量のウイルスが含まれているため、この時期の犬に人や動物が咬まれると狂犬病に感染します。狂犬病は、人も動物も一旦発病したら有効な治療法が無い不治の病です。しかし、ワクチンで予防することが可能です。

海外では“日常的”な存在です。

観光地として有名なインドネシアのバリ島は歴史的に狂犬病の発生が無く、犬へのワクチン接種も行われていませんでした。ところが、2008年に初めて狂犬病による死者が確認されると、その後2015年までの7年間で死者が150人を超える事態となりました。しかし、犬へのワクチン接種は進まず、野犬の殺処分を主にした対策が行われているため、いまだに終息していません。この発生の原因は、違法に島に持ち込まれた犬が狂犬病に感染していたためと言われています。世界に目を向ければ毎年3～5万人が狂犬病により死亡しています(図2)。これら人での狂犬病のほとんどは犬が感染源となっていることから、人での発生を防ぐには犬での狂犬病対策が最も重要といえます。

日本への侵入を 虎視眈々(こしたんたん)と狙っています。

日本は、これまで関係者の努力と島国であるという利点を生かし、狂犬病を水際で食い止めておくことができました。しかし世界中を簡単に短時間で行き来できる今日にあっては、狂犬病がいつ日本に侵入してもおかしくありません。たとえば、密輸された動物、貨物等に混入したコウモリや猫、船員のペットの不法上陸などにより、狂犬病が水際の防御をすり抜けて侵入して来る可能性が否定できません(図3)。



図3 狂犬病の侵入が危惧されるルート

その予防注射が 犬の飼い主に義務付けられています。

狂犬病予防法により、生後91日以上飼育された犬の登録と年1回の予防注射が飼い主に義務付けられています。しかし、実際には日本ペットフード工業会や内閣府などのデータをもとに推計すると、日本における狂犬病予防注射率は40%を切っているものと思われます。これは、WHO(世界保健機関)のガイドラインにおいて、流行を防止するためには常時確保しなければならないとされている免疫水準である「少なくとも70%以上」を大きく下回っています。これでは狂犬病が一旦発生したら、まん延してしまうかもしれません。狂犬病のまん延を防ぐことができるかどうかの鍵は、飼い主ひとりひとりが握っているのです。愛犬への狂犬病予防注射は、愛犬の命だけでなく、人の命を守り、社会を守ることにもつながります。

